

釈文の訂正と追加

福島・荒井猫田遺跡（第一二一号）
あらいねいた

1 所在地	福島県郡山市川向、安積町日出山	(1) 「▽南□」	(251)×25×5 039 第一号
2 調査期間	第一三次調査 一九九九年（平11）四月～一〇〇〇 ○年三月	(2) 「大日如來」	(225)×17×1 051 第二号
3 発掘機関	郡山市教育委員会・財郡山市埋蔵文化財発掘調査 事業団	館B外郭井戸	
4 調査担当者	高田 勝・中島雄一・佐久間正明・工藤健吾	〔符籙〕	216×27×3.5 051 第四号
5 遺跡の種類	町跡及び館跡	〔符籙カ〕	222×22×5 051 第五号
6 遺跡の年代	一二世紀後半～一五世紀	〔大日如來〕	(195)×14×0.5 019 第九号
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要		〔大日如來〕	(221)×12×0.8 019 第三号
		〔大日如來〕	(200)×13×1 019 第十四号
		〔大日如來〕	(228)×13×3 019 第五号
		〔大日如來〕	(210)×11×0.8 059 第十六号
		〔大日如來〕	(216)×13×0.8 059 第十七号
		〔大日〕	(212)×12×1 059 第十八号

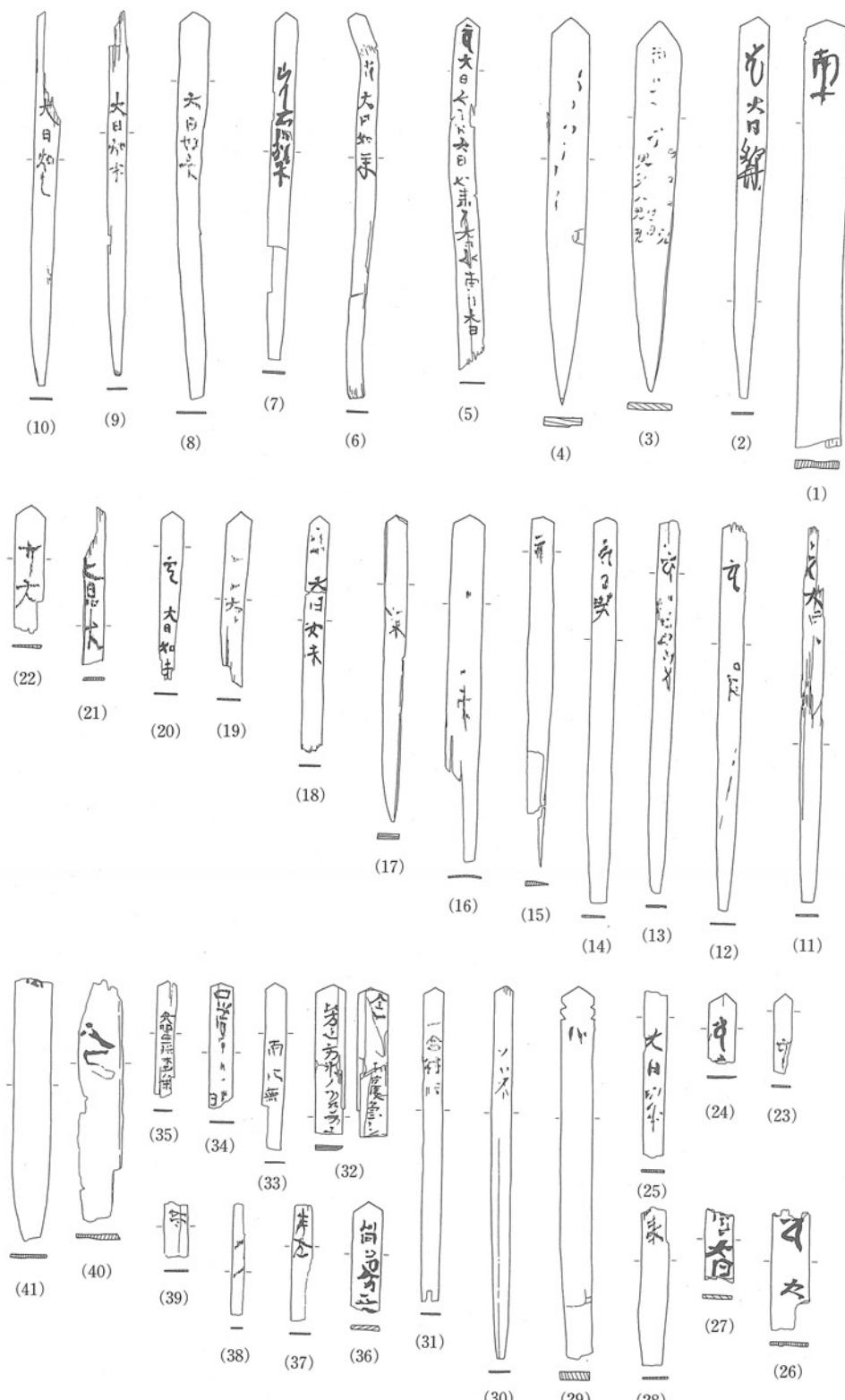
荒井猫田遺跡第一三次調査出土木簡については、九点についてのみ報告したが、同調査の全資料について整理が終了したので、未報告分について報告することとする。

木簡は、町跡地区と館Bを区画する埋没河川から四八点（うち九点が本誌第一二一号で既報告）、埋没河川南岸の町跡地区から確認された井戸から一点、館Bの外堀東側（外郭）の井戸から一点の計五〇点である。木簡の年代は、(1)のみ共伴した木製皿の形などから一四世紀前半、それ以外はいずれも共伴した土師質土器などの年代観から多くが一五世紀に入るものと考えている。

(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
〔大日〕	〔大日如來〕									

(25)	(26)	(27)	(28)	(29)	(30)	(31)	(32)	(33)	(34)	(35)	(36)	(37)	(38)
大日如来	〔大〕	〔大日〕	×来	「√□」	「□ □」	「□□□□」	• 「(符籙) 急々	「南□無」	「□□□」	「□□」	「□」	「來□」	〔來□〕
(96)×13×1 081 第114号	(69)×22×2 081 第115号	(38)×17×2 081 第116号	(91)×14×1 081 第117号	(215)×19×5 039 第118号	(214)×12×1 051 第119号	(181)×11×0.5 019 第四〇号	(85)×17×2.5 019 第四一号	(95)×12×0.5 019 第四二号	(72)×13×0.8 019 第四三号	(67)×10×0.5 019 第四四号	(64)×16×3 019 第四五号	(67)×12×0.8 019 第四六号	(65)×7×0.5 081 第四七号
(208)	(209)	(210)	(211)	(212)	(213)	(214)	(215)	(216)	(217)	(218)	(219)	(220)	(221)
大日如来	〔大〕	〔大〕	〔大〕	〔大〕	〔大〕	〔大〕	〔大〕	〔大〕	〔大〕	〔大〕	〔大〕	〔大〕	〔大〕
(222)×(14)×1 059 第110号	(224)×14×0.8 059 第一九号	(214)×11×0.8 059 第11〇号	(222)×(14)×1 059 第111号	(203)×15×3 019 第111号	(200)×16×1.2 019 第111号	177×13×3 019 第114号	(137)×12×0.7 019 第116号	(101)×14×1 019 第118号	(97)×13×0.8 019 第119号	(82)×12×2 081 第11〇号	(73)×16×1.2 019 第111号	(46)×11×1 019 第111号	(40)×15×1 019 第111号
(25)	(26)	(27)	(28)	(29)	(30)	(31)	(32)	(33)	(34)	(35)	(36)	(37)	(38)

釈文の訂正と追加



(39)



(40)



(41) □

(31)×13×0.5 081 第四八号

(140)×26×3 081 第四九号

(151)×22×2 081 第五〇号

奈良国立文化財研究所

『長屋王家・一條大路木簡を読む』

(奈良国立文化財研究所学報第六一冊)

なお、本誌第一二一号で報告した分と、出土木簡の通し番号の对照は次の通りである。本誌一二二号(1)は第三号、以下(2)第六号、(3)第七号、(4)第一〇号、(5)第一二号、(6)第一二一号、(7)第一五号、(8)第一七号、(9)第八号である。

(押山雄三)

長屋王家・一條大路木簡約十一万点の出土は日本古代史に大きな衝撃を与えた。奈良国立文化財研究所では、その釈読・解明を速やかにし、かつ万全を期せんがために、所外の古代史研究者も交えて「長屋王家木簡検討会」を開いた。この検討会が、長屋王家・一條大路木簡研究の強力な推進力となつたことは言うまでもない。その成果をまとめたのが本書である。総勢一六人の研究者が、それぞれの切り口から長屋王家・一條大路木簡を読み解いている。B5判、口絵八頁・本文三六四頁。

販売は吉川弘文館から。価格は一一〇〇〇円(税別)。